

廣瀬秀雄先生を悼む

弔 詞

我が国における観測天文学をじっとはぐくみ基礎を築いて来られた廣瀬秀雄先生は、去る10月27日享年72才で静かに他界されました。日頃先生の御指導を受けて来た私共にとりましてはまことに哀惜の念に耐え難いものがあります。

先生は兵庫県姫路に生れ昭和7年東京帝国大学を卒業以後、昭和45年に御退官になるまで東京天文台において御活躍になりました。その間特に昭和38年から43年に至る間は、東京天文台長として、また、昭和40年から42年には日本天文学会理事長として日本の天文学会のために尽くされました。この間永年にわたって天文学の研究教育に努め、また測地学・暦学にも貢献されました。

戦前東京天文台のブラッシャー天体写真儀によって、小惑星・彗星の位置観測を始められ、またそれらの天体の軌道運動の研究に業績を挙げられました。即ち多数の小惑星の観測によりそれらの軌道要素を決定し、以前に発見された小惑星との同定を行った仕事は国際的に大きな評価をうけたと聞いております。

彗星については、30年にわたって見失われていたダニエル彗星の再帰を発見されたことは、小惑星エロスの研究と共に有名であります。

先生はまた月による恒星の掩蔽観測の資料をもとに日本の測地原点での鉛直線偏差を決定し、日本列島の測地学的位置が天文学的位置よりずれていることを示し、昭和23年の礼文島日食に際してそのための修正を施して観測地点の選定をし、観測を成功に導かれました。つづいて掩蔽観測を応用して、太平洋をこえて米国と日本との測地網を結合することを試み、更に人工衛星の観測を測地学に利用することを発案し、海上保安庁水路部・国土地理院と共に離島の位置決定に大きな力を発揮されました。

先生には一方、日本の暦法史について多くの研究を残され、特に江戸時代中期に初めて日本人によるところの貞享暦が生れて以後の暦法に関し大きな関心をよせておられました。

しかし、先生の情熱はこれらの研究にとどまることなく、早くから幾何光学の収差論の研究を重ね光学天体望遠鏡特にシュミット型望遠鏡の研究において我が国にお



ける先駆者となりました。そして国産の相当な大きさの反射望遠鏡を作ることについて多大の情熱を傾け、その基礎である素材の研究の推進を手はじめに種々の試作の推進を計り、我が国で国際水準の大型天体望遠鏡が作れるに至るまで、終始指導的役割を果されました。東京天文台の91cm反射望遠鏡、口径105cmの世界最大級のシュミット望遠鏡の完成は先生の長年にわたる御努力の結晶といえましょう。このようにわが国でかなりの規模の国産の天体望遠鏡を作るための礎を築いた功績が今日わが国の観測天文学の飛躍的發展となっていることは云うまでもありません。

先生は東京大学を定年退官され、名誉教授の称号をうけられましたが、尚、埼玉大学次いで専修大学においても天文学に関する教育に従事して矍鑠たる御様子でした。

一家そろってタンデムの自転車で、武蔵野を疾走しておられた御姿が眼に浮びます。御冥福を祈ります。

昭和56年11月7日

日本天文学会理事長
川口市郎